

Molly Worthen,
*Apostles of Reason: The Crisis of Authority in
American Evangelicalism*

Oxford University Press, 2013, pp. 352, \$27.95

飯田 陽子

本書の著者であるモリー・ワーゼンは、北米の宗教思想史研究、特に 20 世紀における保守的キリスト教の思想や文化を専門とする。ワーゼンはイェール大学でアメリカ宗教史の博士号を取得し、現在ノースカロライナ大学チャペルヒル校の歴史学部にて教鞭を執っている。本書では、福音派キリスト教の思想史が取り上げられている。

その中心のテーマは、福音派における権威の危機である。ワーゼンによれば、福音派はその内側に葛藤を含み、かつ聖書の真の意味とは何かを問う疑問を抱えながらも、自分たちを導く権威をこれまで一つとして持つことがなかった。福音派は急進的な個人主義者でありながら共同体や家族に献身的であり、回心体験を重視しながらも宗教的熱狂には慎重であり、世俗的理性に懐疑的でありながら聖書の無謬性を証明する科学的証拠を見出そうと熱心である。ワーゼンは本書を通して、これらの矛盾は、信仰の核心にある権威の危機によって生み出されたものであると論じる。ワーゼンは、キリスト教右派の出現に関する一般的なナラティブの背後に潜む、カリスマ的指導者と信奉者との間のイデオロギー戦争、制度上の衝突を記述し、福音派を文化的政治的勢力たらしめた思想と特性——学問的野心と反知性主義の衝動——について明らかにしている。

このように本書は、福音派史研究に新たな貢献をなすものだが、より広くは、アメリカ宗教史の反知性主義論争に修正論を提示する著書としても位置づけられる。評者はこの反知性主義論争について学ぶ者であるため、本書評ではそこに焦点を当て、本書が現在の論争にどのような課題があることを示しているかを中心に考察を試みたい。したがって、以下の章ごとの内容紹介では反知性主義に関わる部分を抜き出した。

本書の構成は以下の通りである。

Introduction

Part I. Knights Inerrant

1. Errand from the Wilderness
2. The Authority Problem
3. Fundamentalist Demons
4. Reform and Its Discontents

Part II. To Evangelize the World

5. The Marks of Campus Conversion
6. Missions beyond the West
7. Renewing the Church Universal

Part III. Let Them Have Dominion

8. The Gospel of Liberation
9. Evangelicals' Great Matter
10. God's Idea Men
11. The Paradox of the Evangelical Imagination

本論は3部構成となっている。第1部は福音派の思想的側面、第2部は福音派の伝道などの活動、第3部は福音派と政治の結びつきを論じている。

序論において、著者はまず世俗的な知識人と反知性的な福音派、という従来の反知性主義論において提示されてきた対立図式を問題にする。これは、前者は後者を進歩と自由思想への脅威としてみなし、後者は前者が創り出した近代世界における罪は救済されない魂がもたらした不運であり、また知性が犯す誤謬の果実であるとして批判するという対立を表している。福音派が反知性的であるとするこのような従来の論じ方に対し、著者は、アメリカ福音派世界において周辺に位置づけられている諸教派（ウェスレー派、アナバプテスト、ペンテコステ派など）にまで視野を広げ、福音派が反知性的衝動だけでなく学問的野心を備えた幅広く多様な要素を持ち合わせていることを本書を通じて論じていくとしている。

第1部では、福音派の中心的思想である聖書の無謬性——聖書の記述はすべて歴史的、科学的に真実であるとみなす考え——がいかに展開されていったかについて福音派指導者の思想、活動を追うことで論じている。第1章では、福音派の雑誌『クリスチャニティ・トゥデイ *Christianity Today*（以下、*CT*と略）』の初代編集長のカール・ヘンリー（1913-2003）、全米福音協会（National Association of Evangelicals, 以下、*NAE*と略）の初代会長のハロルド・オケンガ（1905-1985）、プリンストン神学校の新約聖書学者のグレッサム・メイチェン（1881-1937）らの福音派知識人が取り上げられている。世俗化や社会主義からアメリカを守る世界観を必要とした当時のアメリカ社会に、聖書の無謬性を土台とする世界観が福音派知識人の知的活動によって広められ、福音

派勢力の拡大に繋がったことが述べられている。

第2章では、超教派的な繋がりを結ぼうとする新福音派と、教派中心志向の福音派の違いについて述べられ、福音派の中でも自ら思考し、より開拓者的精神を持つ新福音派の活動を追っている。新福音派は NAE を創設し全米の保守的プロテスタントを統一しようと試みたが、諸教派の志向とは一致せず初めは失敗に終わった。というのも福音派の人びとの多くは各々の教派リーダーを支持し、NAE のような協同組織を必要としていなかったからである。著者はこのような福音派と新福音派の志向の違いを、前者を教派組織の枠内で活動する「会社員」、後者を知性を自ら開拓し外部からの批判に自らを晒しリスクを負う「企業家」として表現する。このような性格を帯びた新福音派は、聖書の権威をいかに守り、自分たちのキリスト教世界観をいかに普及させるかという目的意識をもち、自分たちのサークルの枠外にも手を伸ばしていったのである。

第3章では、主に、福音派の雑誌である『クリスチャニティ・トゥデイ』の展開とその影響、そして CT の編集者とファンダメンタリズムの結びつきについて論じられている。CT は、キリスト教自由主義神学者の代表的な雑誌である『クリスチャン・センチュリー *Christian Century*』に対抗し得る、福音派の雑誌の必要性を感じた L・ネルソン・ベル (1894-1973) とビリー・グラハム (1918-) の発案で創立された。彼らの形づくる公共の神学は雑ではあるが説得力があり、その洗練されていない複雑さが最終的には重要な鍵となったと著者は述べる。1958 年の調査では CT はプロテスタント系の雑誌の中で最も読まれている雑誌となる。世俗メディアからは、CT はメイチェン以来の「知的ファンダメンタリズム」とみなされ、CT の活動にも、福音派のもつ「知的」な局面は大いに反映されていたといえる。

第4章は、改革派およびファンダメンタリズムの要素を取り入れる新福音派と、それに異議を唱える諸福音派との間の対立に関する記述が中心となっている。例えば、メノナイト派の学者である J・H・ヨーダー (1927-1997) は、改革派ファンダメンタリズムの信奉者だけが理性的な議論をすることが可能であるとするカール・ヘンリーに反論し、ヘンリーをはじめとする新福音派は自分たちの掲げる前提を崇拜物にしてしまっていると批判する。ヨーダーの批判する新福音派の間では、ヨーロッパへ留学し神学的洞察を身につけてくるエリートたちがあらわれはじめた。改革派の神学を背景とした議論が活発となり、聖書の無謬性は多くの福音派にとって常識的な教義となっているように見えた。このような福音派の傾向に対し、メノナイト派、ウェスレー派は各教派の特徴——例えば、メノナイト派の非暴力の倫理、ウェスレー派の強調する個人の敬虔さと社会正義の繋がり——が失われてしまうのではないかと懸念した。

第2部では、主に福音派キリスト教の諸領域（神学校、海外宣教、国内の教会）における伝道活動について触れられている。第5章では、アメリカのファンダメンタリストの中心軸を形成した聖書神学校（Bible College）が次第に世俗教育をカリキュラムに組み入れるようになっていった過程が記述され、ファンダメンタリスト、保守福音派が、外側の世界でどのように自分たちの地位を確立しようとしていたかについて論じられている。彼らは世俗教育に従うことで、福音派世界での聖書神学校の権威を高め、そして非福音派に対してその存在を真剣に捉えるようにならざるを得ない状況をつくり出したと著者は指摘する。

第6章では、福音派の海外宣教について論じられている。福音派において、人類学は宣教のた

めの有効な手段であるとされ、教会成長運動を創始した宣教学者であるドナルド・マクガヴラン（1897-1990）は、宣教地の文化の綿密な研究が最も効果的な道筋であるとした。著者はペンテコステ派の世界的成長にも触れ、それはアメリカの福音派にスピリチュアルな宗教経験の限界に関する考えに修正を余儀なくさせたと述べる。ペンテコステ派がもたらした「カリスマ的復興運動 charismatic renewal movement」は、主流派プロテスタントおよび福音派の教会へと広まり、特に若者をひきつけた。著者は、教会成長運動が西洋的合理主義を具体化したものであるとするなら、このカリスマ的復興運動は近代西洋的理性の指図に対抗する本能的反応を表しているとする。

第7章では、1960、70年代のキリスト教界の再編成の時期におけるアメリカの教会の展開が論じられている。第二バチカン公会議において教会間対話の必要性が訴えられ、またこの頃、アメリカのカトリック教会では近代性を排した伝統的な礼拝のあり方が熱心に志向されていた。この動きはプロテスタント教会で礼拝の一新を図るプロテスタントたちの求めるあり方も重なっていた。著者は、両教会のこのような動きはエリート主義的傾向を帯びており、当時の「無知」で大衆的な礼拝のあり方を取り除く方法として、前近代的権威が志向されたと指摘する。一方、メガチャーチが拡大し発展を遂げるが、福音派の悪しき特徴の極致——超個人主義、脆弱な神学、中流知識人嗜好——であると非難され、メガチャーチに対するこのような反発が古い伝統の復興を一層煽ったとされる。

第3部では、20世紀後半の文化戦争と福音派をめぐる記述がなされる。第8章では、1960年代の福音派内部における保守派と福音派左派の対立が文化戦争の一断片として示された。著者によれば、福音派左派は教会史に道しるべを求め、そこにキリスト教政治にとって強力な先例を見出した。保守派は彼らが聖書の無謬性への信仰を捨てモダニスト神学に騙されていると批判した。しかし一方で、若者のクリスチャンからはファンダメンタリストは近代性との行き過ぎた妥協を許し、聖書に対する科学的批判と政治的選択の下に聖書を位置づけることを押し進めたモダニストとして捉えられた。福音派内部におけるこれらの論争が福音派フェミニズムの神学、アナバプテストのベトナム戦争時の復興などを通して論じられている。

第9章では、1970年代における福音派の内部論争のおさまりとともに展開されるようになるキリスト教右派の政治的活動について記述されている。福音派の聖書の無謬性に対する執着の薄れ、クリスチャン・ヴォイスやモラル・マジョリティなどのキリスト教右派組織の出現、福音派諸教派における女性聖職者の叙任問題、そして1960年代後半から1970年代にかけて現れたフランシス・シェーファー（1912-1984）ら福音派指導者の活動を取り上げ、福音派の政治的領域における勢力拡大の過程が描き出されている。

第10章では、保守的福音派の権力拡大が、聖書よりも世界観や人類の歴史といった知的でレトリカルな主張を用いることでなされたことについて論じられている。著者によると、1970年代後半から1980年代前半のキリスト教右派は、新しく有能な組織と、計画を抱く政治活動家のネットワークであり、その計画には新たな論法、教育、歴史記述の改訂などに関することが含まれている。例として、ホームスクール運動や、R・J・ラッシュドゥーニー（1916-2001）によるキリスト教再建主義などが言及されている。

最終章である第 11 章で、著者は、福音派であり歴史学者でもあるマーク・ノールが 1994 年に出版した『福音派知性のスキャンダル *The Scandal of the Evangelical Mind*』の中で述べられている福音派知性の衰退に対するノールの懸念について紹介し、彼が論じる知性に関する問題が福音派の拡大とどう結びついているかを論じている。

以下では、冒頭で述べたアメリカ宗教研究における反知性主義論争に関するこれまでの議論展開を概観し、次に著者の提示する観点をそれまでの議論に対する修正論として捉え、反知性主義論争における本書の位置づけ、および意義と問題点について検討したい。まず、1940, 50 年代のアメリカ史研究では、ファンダメンタリズムを地方のプロテスタントによる反知性的な抗議の現れとするという見方が支配的であった。例えば、H・L・メンケン、『メンケン名文集 *A Mencken Chrestomathy*』(1949) に収められている「プロテスタンティズムの崩壊 *The Collapse of Protestantism*」の中で、ファンダメンタリストはもっとも無知なレベルの教育者であるとした。また、H・リチャード・ニーバーは、『社会学事典 *Encyclopedia of Social Sciences*』(1937) の「ファンダメンタリズム」の項目で、ファンダメンタリズムとは、地方から都市——つまり伝統的社会から近代科学的社會——に対する反発の現れであるとした。このような論調は、リチャード・ホフスタッターの『アメリカの反知性主義 *Anti-Intellectualism in American Life*』(1963) で頂点に達し、ファンダメンタリズムは学問に対する敵意をもっともよく示している事例として言及された。

ファンダメンタリズムは理性の働きに本来対立するものであるとする以上のような反知性主義論に対して最初に反論を投げかけたのはポール・カーターである。カーターは、『20世紀アメリカにおける変遷と継続、1920年代 *Change and Continuity in Twentieth-Century America. The 1920s*』(1968) の「ファンダメンタリストの信仰の弁明 *The Fundamentalist Defense of Faith*」の中で、グレッサム・メイチェンの思想に言及しながら、ファンダメンタリズムが学界および主流プロテスタントでは不評であるものの、自由主義神学と同様に理性に関心を抱き、独自の信仰と考えを有した複雑で体系的なまとまりであるという修正論を提起した。続いて1970年にアーネスト・R・サンディーンが『ファンダメンタリズムの根源——英国と米国の千年王国説、1800 - 1930 *The Roots of Fundamentalism: British And American Millenarianism, 1800 - 1930*』、1980年にはジョージ・M・マースデンが、『ファンダメンタリズムとアメリカ文化——1870年から1925年にかけての20世紀福音派の形成 *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth-Century Evangelism, 1870 - 1925*』を出版し、ファンダメンタリズムの主知主義的、理性主義的な特徴が具体的に論じられた(Hart. D.G., “When Is a Fundamentalist a Modernist? J. Gresham Machen, Cultural Modernism, and Conservative Protestantism.” *Journal of the American Academy of Religion* 65.3 (1997): 605-633)。日本におけるアメリカ宗教史研究でキリスト教と反知性主義の繋がりに関して論じているものでは、森本ありりの『アメリカ的理念の身体』(創文社、2013年)がもっとも最近の文献としてある。この著書では、主にホフスタッターの反知性主義論を受け継ぐ議論が展開されており、したがって森本の論にはカーター以降の修正論は組み込まれていないと考えられる。

ワーゼンの著書は、上記にあるカーター、サンディーン、マースデンが提示した修正論に新たな考察を加えるものとして位置づけられる。新たな考察というのは、マースデンらがその論拠としてメイチェンを主に引き合いに出していたのに対し、著者は、メイチェンに限らず福音派キリスト教の指導者や思想家を幅広く取り上げ、福音派の知性的局面を福音派キリスト教世界の全体的見取り図を描述することで指摘したことである。また、著者は福音派が知性的なものであり反知性的ではないとするだけでなく、その運動の展開を辿ることでその反知性的局面も明らかにし、アメリカの福音派は知性、反知性の両方の局面を持つ両義的なものであると論じる。

しかし、評者の見たところ、反知性主義の前提となる知性の定義に関して、ホフスタッターらが捉える知性と、著者の捉える知性にはその捉え方に違いがあり、議論がすれ違いになっている。著者はアメリカの福音派キリスト教における反知性的側面をメガチャーチの出現やカリスマ的復興運動、そして前近代的教会儀式への表面的な傾倒といった文脈に見出していると考えられる。著者によると、メガチャーチは福音派の知的復興における先駆ではなく、カリスマ的復興運動は理性よりも熱狂をもたらし、そして伝統的儀礼への傾倒は福音派の歴史意識をそこまで深く喚起したわけではなく表面的なものである。そして著者は、これらは福音派の本来の目的——世界を変え、迷える人々に福音を説き、神の国をもたらすこと——への妨げであるとする。

福音派の知性面に関しては、著者は「知的権威 intellectual authority」という概念を提示している。著者の捉える知的権威とは、アイデアをともなった「説得力 force of persuasion」であり、人びとの考えに訴える力であり、人びとを動かすことのできる力であると定義されている。著者はアメリカ福音派の「知的活動 intellectual life」の過去 70 年間を振り返り、彼らの発展、展開を福音派の知識人、すなわちアイデアを創出し広める説教者、教師、文筆家、組織結成者らの活動をたどることで記述した。そして、知的権威とは必ずしも神学的知識や歴史的知識を必要とせず、学問的知識に基づくものではないとの見方を示した。

一方、福音派あるいはファンダメンタリズムを反知性的とする研究者やジャーナリストは、福音派は文化的に疎外された地方プロテスタントの不満の表出であるとし、また、H・リチャード・ニーバーは、ファンダメンタリズムを地方と都市の文化の衝突であり、近代科学の影響を受け難い孤立したコミュニティにもっとも流布しているとした。ここで知性として前提されているのは、都市における近代科学の影響を受けた、いわゆる世俗的な知識に基づいた知性であると考えられる。

しかし、著者が描述する知性は、人のアイデア、想像力が核となっており、それを展開させていく福音派の指導者たちが知識人として位置づけられていると考えられる。例えば、後半で記述されるフランシス・シェーファーの描く歴史観は、学問的にみると妥当ではなく、彼は学者としては位置づけられないが、それでも彼の提示する世界観は多くの人に訴えかけ大きな影響をもたらした。シェーファーは、アカデミーに属する世俗的知識人ではないが、知的権威を備えた福音派の指導者として捉えられる。

このように著者と、福音派に批判的な論者の間では、「知性」概念自体の性質が異なるのだが、では福音派を知性的と捉えたカーターらの「知性」概念との異同はどうだろうか。まず、カーター、サンディーン、マースデンの修正論に共通していると考えられるのは、知性を神学的文脈に

見出していることである。カーターは、プリンストン神学者で福音派であるメイチェンの継承するプリンストン神学の存在を提示することで、福音派の神学的権威に裏打ちされた知性を主張した。サンディーンは、ファンダメンタリズムの起源をディスペンセーション主義の前千年王国説およびプリンストン神学校の聖書の無謬性の教義に見出した。マースデンは、ホーリーネス神学とスコットランド常識学派をファンダメンタリズムの知のルーツとして捉えた。以上のように、この3者が論じる「知性」は神学的な知的権威が根底に敷かれていると考えられる。一方、ワーゼンの論じる「知性」は、先述したようにアイデアであり説得力を土台とする知的権威によって支えられている。

ここまで反知性主義論争において示されてきた知性概念の捉え方に関する3つの異なる立場について記述した。これらそれぞれの見方を比較して言えることは、反知性主義論争の中では、3種類の知的権威——近代科学、神学、アイデア／説得力——に基づく知性が提示されているのではないかということである。あるいは、近代科学と神学という学問的な知と、アイデア／説得力というカリスマ的知性の2種類とも言えるかもしれない。学問的知性に対置される反知性には無知や無教養といった要素が見出されるが、ではカリスマ的知性における反知性とは何か。著者が福音派における「妨げ」（＝反知性）として言及したメガチャーチやカリスマ的復興運動と、福音派の知性として記述したシェーファーのような例とは何が異なっているのか。ここで鍵となるのは、おそらく著者が述べる「説得力」であると考えられる。メガチャーチなどの活動は、民衆側のニーズに合わせる方向で展開される。一方、知性的なカリスマ的指導者は自らの考えでもって人々を説得し、自分たちの側に民衆を巻き込んでいく方向で活動を展開する。この方向性の違いによって、著者は自身の議論における知性と反知性を区別していると考えられる。

以上の考察を踏まえ、現在の反知性主義論争の抱える課題を特定すると、学問的知性とカリスマ的知性という2つの知性概念のずれをどう捉えるかという点と、ワーゼンが提示した「知的権威」をどう位置づけるかという点が挙げられるのではないか。「知的権威」の概念の提起によって、先行研究では「反知性」としてくられてきた人物や運動が、民衆に先導されるタイプと指導者に先導されるタイプの2つに分けられ、ワーゼンの論では後者が知性として修正された。しかし、このような「知性」と「反知性」のあり方は、反知性主義論争の中で「知的権威」の拠り所を何に見出すのか——つまり、学問的知性、カリスマ的知性、あるいは他の要素を知的権威の土台とするのか——によって異なってくる。例えば、知的権威を学問的知性であるとするならば、反知性は大衆的で無教養なものとされ、知性はアカデミックな文脈に位置づけられる。また、知的権威をカリスマ的知性とするならば、上記の学問的知性に対置される反知性は「民衆先行型」と「指導者先行型」というタイプに分類され、後者は知性として捉え直される。このように、知的権威の根拠に何を据えるかによって知性と反知性が示す内容には違いが生じることが分かる。したがって、ワーゼンによる知的権威という概念の捉え直しの提起は反知性主義論争に新たな議論展開をもたらすきっかけとなるのではないかと考えられるのである。